

★大辞林 第三版の解説

せきへき【赤壁】①中国、湖北省の長江中流南岸にある古戦場。赤壁の戦いが行われた所。
②中国、湖北省の東部、武漢より下流の長江北岸に臨む地。蘇軾(そしよく)が「赤壁賦(せきへきのふ)」を詠じた所。

孫権 (182～252) 中国、三国時代、呉の初代皇帝(在位 222～252)。孫堅の次子。蜀しよくの劉備と結んで曹操の南下を赤壁に阻止し、江南に勢力を確立。

周瑜 (175～210) 中国、三国時代の呉の武将。字は公瑾。孫権を助け呉の建国の基礎を築いた。208年赤壁の戦いで曹操を破ったが、四川攻略直前に病死。

魯肃 (172～217) 中国、三国時代、呉の功臣。字は子敬。周瑜とともに孫権に仕え、赤壁の戦いでは主戦論を唱えた。その後、親劉備の立場を取りつつ荊州の経営に務めた。

諸葛亮 (181～234) 中国、三国時代の蜀漢の宰相。字は孔明。劉備に三顧の礼を受けて仕えたと伝えられ、天下三分の計を上申、劉備の蜀漢建国を助ける。劉備死後、子の劉禪を補佐し、五丈原で魏軍と対陣中死去。↓出師すいしの表

曹操 (155～220) 中国、三国時代魏の始祖。字は孟徳。諡は武帝。廟号は太祖。黄巾の乱を平定。後漢の献帝を擁して華北を統一したが、江南進出は劉備・孫権の連合軍に阻まれた。詩賦をよくした。

★陸戦と水戦の性質の違い

赤壁の戦い(二〇八年)、鄱陽湖(はようこ)の戦い(一三六三年)、黄海海戦(一八九四年)

★正史『三国志』の記載

「魏書・武帝紀」より

十二月、孫権為備攻合肥。公自江陵征備，至巴丘，遣張熹救合肥。權聞熹至，乃走。公至赤壁，與備戰，不利。於是大疫，吏士多死者，乃引軍還。備遂有荊州、江南諸郡。

「呉書・周瑜伝」より

時劉備為曹公所破，欲引南渡江。與魯肅遇於當陽，遂共圖計，因進住夏口，遣諸葛亮詣權。權遂遣瑜及程普等與備並力逆曹公，遇於赤壁。時曹公軍眾已有疾病，初一交戰，公軍敗退，引次江北。瑜等在南岸。瑜部將黃蓋曰：「今寇眾我寡，難與持久。然觀操軍船艦，首尾相接，可燒而走也。」乃取蒙沖斗艦數十艘，實以薪草，膏油灌其中。裹以帷幕，上建牙旗，先書報曹公，欺以欲降。又豫備走舸，各系大船後，因引次俱前。曹公軍吏士皆延頸觀望，指言蓋降。蓋放諸船，同時發火。時風盛猛，悉延燒岸上營落。頃之。煙炎張天，人馬燒溺死者甚眾，軍遂敗退，還保南郡。

★兵法について

借刀殺人　しゃくとうさつじん　他人を誘導して邪魔者を排除させること
調虎離山　ちようこりざん　強大な敵を味方にとつて有利な戦場に引きずり出すこと
反間計　はんかんのけい　スパイを活用した謀略をすること
苦肉計　くにくのけい　敵をあざむくために自分や味方を傷つけること
連環計　れんかんのけい　鎖の輪のように次々と計略をしかけること
関門捉賊　かんもんそくぞく　袋のネズミにすること

★世界大百科事典 第2版の解説

せきへき【赤壁 Chi bi】中国，長江（揚子江）流域に点在する地名。なかでも湖北省嘉魚県西のものが，赤壁の戦の地として有名。華北平定に成功した曹操は，208年（建安13）中国統一の目的で南下してきた。劉備の謀臣諸葛孔明（しよかつこうめい）は孫権のもとに赴き，劉備・孫権の同盟に成功，長江を下つて来た曹操の軍と赤壁で対峙，火攻の計でこれを打ち破つた。こうして天下三分の情勢がほぼ成立した。なお蘇軾（そしよく）（東坡）の《赤壁賦》に歌われた赤壁は湖北省黄冈（古称は黄州）にある。

★現代中国語の、赤壁の戦い関係の「歇後語」

諸葛亮三气周瑜―略施小技（孔明が周瑜を三回怒らせた―小技を見せる）
魯肅上了孔明船―糊里糊涂（魯肅が孔明の船に乗った―さっぱりわからない）
諸葛亮借箭―有借无还（孔明が矢を借りた―借りても返さない）
草船借箭―满载而归（草船で矢を借りた―満載して帰る）
曹操遇蒋干―倒了大霉（曹操が蒋幹と出会った―とても気の毒）

蒋干盗书―上了大当(蒋幹が手紙を盗んだ―毘にはまった)

周瑜打黄盖―一个愿打、一个愿挨(周瑜が黄蓋を打った―なれあいの八百長)

孔明借东风―巧用天时(孔明が東の風を借りた―天の時を巧みに用いた)

诸葛亮借东风―神机妙算(孔明が東の風を借りた―神のように優れた計算)

曹操下江南―来得凶、败得惨(曹操が江南に下る―来た当初は凄かったのに、惨敗)

曹操败走华客道―不出所料(曹操が華容道を敗走した―予想のうち)

★杜牧(八〇三〜八五三)の七言絶句「赤壁」

折戟沈沙鐵未銷 折戟 沙に沈んで 鉄未だ銷せず

自將磨洗認前朝 自ら磨洗を將って 前朝を認む

東風不与周郎便 東風 周郎の与に便せずんば

銅雀春深鎖二喬 銅雀 春深うして 二喬を鎖さん

セツゲキ、スナにシズんで、テツ、イマダシヨウせず。ミズからマセンをモって、ゼンチヨウをミトむ。トウフウ、シユウロウのタメにベンせずんば、ドウジャク、ハル、フコウしてニキヨウをトザさん。

折れた矛が川の砂の中に埋もれていた。鉄はまださびきつていない。自分で磨いてみると、前の時代のもので確認できた。もしあの時、周瑜に有利な東の風が吹かなかったら、銅雀台の春の深いところで、喬家の姉妹が閉じ込められていたことだろう。

★吉川英治『三国志』赤壁の巻より

周瑜は、あたりを見まわした。陣中寂(せき)として、ここの一穂(すい)の燈火(ともしび)のほか揺らぐ人影もなかった。

何事か、二人はしめし合わせて、暁に立ち別れた。周瑜は、一睡してさめると、直ちに、中軍に立ち出で、鼓手(こしゅ)に命じて、諸人を集めた。

孔明も来て、陣座のかたわらに床几(しょうぎ)をおく。周瑜は、命を下して、

「近く、敵に向って、わが呉はいよいよ大行動に移るであろう。諸部隊、諸将は、よろしくその心得あつて、各兵船に、約三カ月間の兵糧を積みこんでおけ」と命じた。

すると、先手の部隊から、大将黄蓋(こうがい)がすすみ出ていった。

「無用なご命令。いま、幾月の兵糧を用意せよと仰せられたか」

「三月分と申したのだが、それがどうした」

「三月はおろか、たとえ三十カ月の兵糧を積んだところで無駄な業(わざ)、いかでか、曹操の大軍を破り得よう」

周瑜は、勃然(ぼつぜん)と怒って、

「やあ、まだ一戦も交じえぬに、味方の行動に先だって不吉なことばを！ 武士ども、その老いぼれを引っくくれ」

黄蓋も眦(まなじり)を裂いて、

「だまれ周瑜。汝、日頃より君寵をかさに着て、しかも今日まで、碌々(ろくろく)と無策にありながら、われら三代の宿将にも議を諮(はか)らず、必勝の的あてもなき命をにわかに発したとて、何で唯々諾々(いいだくだく)と服従できようか。——いたずらに兵を損ずるのみだわ」

「ええ、いわしておけば、みだりに舌をうごかして、兵の心を惑(まど)わす痴(しれ)者め。誓って、その首を刎ね落さずんば、何を以て、軍律を正し得ようか。——これっ、なぜその老いぼれに物をいわしておくか」

「ひかえろ、周瑜、汝ごときは、せいぜい、先代以来の臣ではないか。国祖以来三代の功臣たる此方に、縄を打てるものなら打ってみよ」

「斬れっ。——彼奴(きやつ)を！」

面に朱をそそいで、周瑜の指は、閻王(えんおう)が亡者(もうじや)を指さすように、左右へ叱咤した。

「あっ、お待ち下さい」

一方の大將甘寧が、それへ転(まる)び出て、黄蓋に代って罪を詫びた。

しかし黄蓋も黙らないし、周瑜の怒りもしずまらなかった。果ては、甘寧まで、その間から刎ね飛ばされてしまう。

「すわ、一大事」と諸大將も、今はみな色を失って、こもごもに仲裁に立った。いやともかく大都督周瑜に対して抗弁はよろしくない、諸人地に額(ひたい)をすりつけて、

「国の功臣、それに年も年、なにとぞ憐みを垂れたまえ」と、哀願した。

周瑜はなお肩で大息をついていたが、

「人々がそれほどまでに申すなれば、一時、命はあずけておく。しかし軍の大法は正さずにはおけん。百杖(じょう)の刑を加えて、陣中に謹慎を申しつける」と、云い放った。

即ち、獄卒に命じて杖百打を加えることになった。黄蓋はたちまち衣裳甲冑をはぎとられ、仮借(かしゃく)もなく、棍棒を振りあげてのぞむ獄卒の眼の下に、無残、老い細った肉体を、しかも衆人監視の中に曝(さら)された。

★京劇「赤壁之戦」曹操の歌

<http://www.geocities.jp/cato1963/kgk-2008.html>

（「哭相思」で唱う）対酒当歌、どういじうだんごー 人生幾何。れん しよん じーほー 譬如朝露、びーるー ぢやおルー 去日苦多。ちゅいりーくー どうお（セリフ）慨当以慷、がいだんいーかん 幽思難忘。ようすーなん わん（「哭相思」

で唱う) 何以解憂、ほー いー じえ よう 唯有杜康。うえい よう どうー か
ん(「山歌」で唱う)

月明星稀、ゆえ みんな しん しー 烏鵲南飛。うー ちゅえ なん ふえい
繞樹三匝、らお しゅー さん ざー 無枝可依。うー ちー こー いー
山不厭高、しゃん ぶー いえん がお 水不厭深。しゅい ぶー いえん しえん
周公吐哺、ちよう こん とうー ぷー 天下帰心。ていえん しあ ぐい すいん
僥倖、僥倖! じゃお しん (のー)、じゃお しん (のー)

曹操が詠んだ漢詩「短歌行」

【原文】 对酒当歌、人生幾何。譬如朝露、去日苦多。慨当以慷、幽思難忘。何以解憂、唯
有杜康。青青子衿、悠悠我心。但為君故、沈吟至今。呦呦鹿鳴、食野之苹。我有嘉賓、鼓瑟
吹笙。明明如月、何時可採。憂從中來、不可斷絕。越陌度阡、枉用相存。契闊談讌、心念旧
恩。月明星稀、烏鵲南飛。繞樹三匝、何枝可依。山不厭高、海不厭深。周公吐哺、天下帰心。
【訓読】 酒に対しては当に歌ふべし、人生幾何ぞ? 譬へば朝露の如し、去りし日は苦だ
多し。慨すれば当に以て慷すべし、幽思は忘れ難し。何を以て憂いを解かん? 唯だ杜康、
有るのみ。青青たる子が衿、悠悠たる我が心。但だ君が為の故、沈吟し今に至る。呦呦と鹿
鳴き、野の苹を食す。我に嘉賓有らば、瑟を鼓し笙を吹く。明明として月の如きも、何れの
時にか採るべし。憂ひは中より来たりて、断絶すべからず。陌を越え阡を度り、枉げて用つ
て相存す。契闊談讌し、心に旧恩を念う。月明らかに星稀に、烏鵲南に飛ぶ。樹を繞ること
三匝、何れの枝にか依るべき? 山は高きを厭わず、海は深きを厭わず。周公、哺を吐きて、
天下心を帰す。

